
ななつ.....

ことぶきはじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ななつ……

【Nコード】

N2179Z

【作者名】

ことぶきはじめ

【あらすじ】

君島静奈が青井優に語る、学校で起こる怖い話。それをオムニバス形式で掲載していきます。

プロローグ（前書き）

怖い話が苦手な方はご遠慮ください。また一部残酷描写などもありますので、こちらも苦手な方はご遠慮ください。

プロローグ

ななつ……

作：ことぶきはじめ

なぜ彼女に声を掛けたのか。

声を掛けなかったら、彼女はずっと独りぼっちだったかもしれない……。

私を理解できる人間なんて、この世には存在しないのに、なぜか彼女は私を理解してくれそうな、そんな気がした。

もしかしたら、彼女は私が捜している人だろうか……。
だから声を掛けた。

おそらく、それが始まり……。

土曜日の正午過ぎの教室に、きみしましずな君島静奈はただ一人、本を読んでいた。

今にも降り出しそうな分厚い雲のヴェールが空全体を覆っているため、昼を過ぎたばかりだというのにやたらと薄暗く、静奈のいる教室も例外ではない。

教室の電気は点灯しているが、それでもこの陰鬱とした雰囲気
を払拭することは出来ずにいた。

いつもなら校庭から聞こえる部活動の声も、この天気
のせい
か、
開け放たれた窓からは僅かに聞こえてくるだけである。

静奈は湿った風を頬に受け、フウと嘆息する。それから「まったく……」と小さく呟いた。

視線を彷徨わせていた文庫本を閉じ、ゆっくりとした動作で窓際まで立ち寄って、窓を閉める。

本来なら帰宅部である彼女は、すでに下校していてもおかしくない。けれど、ここ最近の物騒な事件のせいで、彼女の兄である静也が迎えに来る手筈となっている。

静奈の両親の帰宅はいつも遅く、その帰宅の遅い両親の代わりに何かと面倒を見てくれるのが、少し歳の離れた兄の静也だ。

静奈は兄の静也以上にしっかりしている。両親の信頼もある。けれど静也は妹の静奈をいつも心配し、なにかと世話を焼きたがった。静奈にしてみればそれが少々鬱陶しくもあったが、ここ最近の通り魔事件を考えれば、やや仕方のないことでもあった。それに兄の顔を見ないというのも何か寂しいものがある。

それでも、ここまで過保護すぎるのもいかなものか。とも思っており、兄に向かってそんな事を言えば、目を三角にして憤慨するかもしれない。

兄には少々シスコンの気があるのだ。頭の隅でそんな事を考え、閉じた窓枠に手を当てたまま、静奈は頭を振った。

英語や運動をえらく苦手としてはいるものの、全般的には成績優秀ではある静奈だが、料理は苦手の部類である。そんな静奈に対して朝昼晩と三食をきちんと準備する静也は、静奈にとっては必要不可欠な存在であった。

だから下手な事を言って機嫌を損ねるわけにはいかない。自分の生活環境を悪くしないために、以上のようなことを兄の前では口にしないでおこう、そう心に誓う。

もっとも、普段から表情の乏しい静奈の心の動向など、無頓着と朴念仁が服を着て歩いているような兄には、決して見破る事など出来ないのだが……。

クルリと身を翻し、自分の席へ戻ろうとする。その時、どこから

入ったのか分からない風に、長く艶やかな静奈の黒髪がふわりと舞上がった。

またか。そう思い周囲を見渡すが何も無い。やや乱れた髪を直して静奈は再び席に着き、読書を再開した。

窓を閉じてしまえば外界の雑音は全て遮断され、静奈の息遣い以外にも音を発するものはない。

正面の黒板の上に掲げられている時計でさえも、静かに時を刻むだけである。ただ静奈の、本を捲る時の音だけが、この教室に存在していた。

十数ページほど読み進めたところで、ふと何かの気配を感じる。本をそのままにして顔を上げ、辺りを警戒する。

静奈の切れ長の目が、教室の片隅にいる人物を捉えた。

静奈は自分が、部屋に何者かが入ってきたのも気付かないくらいに読書に集中していたのだろうか、と小首を傾げる。

ズボラな兄の静也などであれば、十メートル先からでもその存在を感じる事が出来るし、他の誰かが部屋に入ってくれば、静奈にはその気配が分かる自信があった。

だが、教室の隅にいる人物を確認すると、自分が気配を察する事が出来なかったことに納得した。気配をなるべく感じさせないのは、彼女の得意技でもあったから。

「よつやく気付いてくれた、君島さん？」

気配を感じさせない得意技とは真逆に、その存在は他者の目を惹いた。

やや明るい色に染めた肩までの髪の毛は、軽くウェーブがかっており、相手を覗き見るような動作をするこの少女にはよく似合っている。

キヨロキヨロとよく動く大きな瞳に、小さな鼻、それに形の良い唇。頬にはソバカスの痕が存在するが、それがこの少女に愛嬌さを醸し出していた。

身長は静奈よりもやや高い。その彼女がズカズカと静奈の傍までやってきて、ズイツと身を乗り出して静奈の顔を覗き込んだ。

静奈も負けじと、じつと相手を見つめ返す。もっとも相手からすれば、睨まれている感じがするのだが……。

「何か用かしら？」

青井優^{あおいゆう}。それが彼女の名前だった。

優はおどけて肩を竦めてみせ、それから静奈の前の席の椅子に跨るようにして座り込んだ。

背もたれの部分に肘をつき、右掌に自分の顔を預ける。

「なーんかさあ、こつ暇でさあ……」

気怠そうに、そして相手に対しては甘えるような声を出す。

今度はやや下方から静奈の顔を覗き込み、何かを期待するような視線を投げつける。

静奈はそんな優を一瞥すると、文庫本を閉じ、それを鞆に仕舞い込もうとする。

それを見た優が慌てた。

「ちょ、ちょ、ちょっと、なんで帰ろうとするわけよ！ それって

「すごく失礼じゃない？」

「だったら青井さんも帰ればいいじゃない？」

「土曜日に早く帰ったってしょうがないじゃない！ 君島さんだつて、暇なんでしょう？」

「ううん。忙しいわ」

「何でそんなにイケズなのよお！ 可哀そうなあたしに、ちよーつとぐらい付き合ってくれてもいいじゃない！」

「嫌」

淡々と素っ気なく答える静奈に、優はバタバタと腕を振り回す。構って欲しいアピールをしているのだが、目の前でそれをやられば少々鬱陶しい。

両手をバタつかせる優を黙って一睨みする。その表情は綺麗なだけに迫力がある。優はそんな静奈の視線に耐え切れず、大人しく席に着いた。

その時、静奈の鞆の中から着信メールを報せる音が鳴った。鞆の中を漁る静奈を見ながら、優は椅子に座りなおして背凭れに両腕を預け、そこに顔を乗せる。

「君島さんって、携帯持ってるんだ」

心底意外そうに、携帯を弄る静奈を見つめる。

「まあ、家族以外誰も電話しないけどね」

「ふーん。で、誰から？ 彼氏とか？！」

相変わらず人の話を聞かない奴だ。静奈は携帯を弄りながら、頭の隅でそんな事を考える。

その優はまたしても身を乗り出して、静奈の携帯を覗き込もうとする。

静奈はクルリと身体ごと相手に背を向けて、携帯画面を見られないようにする。

暫くの間無言でカチカチと携帯を弄り、それから携帯の蓋を閉じると、再びそれを鞆へと戻した。

「ねえねえ、誰からのメール？ やっぱり彼氏とか？」

興味津々、喜色満面といった感じで、静奈に問いかける。静奈は「違うわよ」と静かに相手の言葉を否定する。けれど優は引き下がりにそうにない。

静奈は優がどうやら解放してくれそうにないので、渋々といった感じでメールの内容を話した。

「お兄ちゃんからのメール。迎えに来るのは4時を過ぎそうだって、そういう内容のメール」

「ふーん、そうなんだ。あつ、じゃあ、それまでは暇なんだ！」

優の瞳を見れば、その瞳の中がキラキラと輝いているのが見えた。静奈が黒板の上にかかっている時計を見ると、時計の針は1時20分を指し示している。

あと2時間40分。読書をするだけでは間が持ちそうにない。今読んでいる文庫本も、あと一時間もすれば読み終わるだろう。

それが少し勿体なく感じられるし、目の前の優を一人にしておく、こちらの読書の邪魔をしかねない。

「しょうがない」相手に聞こえないくらいに小さな声で呟くと、静奈は優の提案に乗ることにした。

けれど話題を提供できるほど、静奈は流行に敏感な方ではない。どちらかといえば一人でいることを好むし、またその方が気が楽だったので、あえて他人を自分のテリトリーへ入れることはしなかった。

自然と興味のあるものは、自分の世界観を構築するものだけとなってしまう。話題が少ないのはそのためだろう。

けれど静奈はそれでもよかった。自分を理解してくれる人物など、兄の静也以外存在しない。そんな思いがあるため、静奈はクラスメイトとは一定の距離を保って接している。

だが目の前に存在する青井優は、その距離を乗り越えて静奈と接していた。そういう意味においても、青井優という少女はかなり稀有な存在であった。

それはさておき、何か話題を提供できないものだろうか？ 静奈がそう思った時、向かいに座る優が、きっかけを作ってくれた。

「何か面白い話ってないの？」

優が瞳を輝かせ、静奈に尋ねてきた。

優は静奈が、優が知る限り他の色々な人物よりも沢山の本を読んでいるのを知っていたし、その沢山の中から何か面白い話でも聞きだそうと思っただけかもしれない。

だから特に意識したわけではないだろう。けれどこれは静奈にとってありがたかった。

静奈は先ほどしまった携帯を思い出し、それからひとつ、目を閉じた。

「じゃあ、学校の不思議な話でもしましょうか？」

「えっ！ 学校の七不思議？ あの、……トイレの花子さんとかってやつ？」

「それとは違うけど……」

「なーんだ、違うのか」

相手の落胆する表情を見て、静奈は薄く笑う。

「けど、実際にあった話よ。そういうのは嫌い？」

「怖い系の話？ それはちょっと苦手かも……」

「ふーん。じゃあ、私が読んだ本の話でも聞く？」

「どんなマンガ？ ジャンプ系だったら大丈夫」

「マンガじゃないわ。デュマ・フィスの……」

静奈が作品名を言おうとしたところで、優が待ったをかける。難しそうな表情で右手人差し指を、自分のおでこにあてがう。その仕草がどこかコミカルで、愛嬌を誘う。

「やっぱり怖い話にして。難しい話は眠くなるから……」

「……………」

静奈は、真面目にそう言う優を、マジマジと見つめる。

それからコホンとひとつ咳払いをし、深く椅子に座りなおし頭を下げた。

演出だろうか、前髪が邪魔をして、静奈の顔が隠れてしまう。

「じゃあ、開けてはいけないメールの話でもしましょうか？」

下げた顔から、低く唸るような感じの声が聞こえてくる。

「えっ！ この学校って、そんな話があるんだ。私知らなかった！」

優は努めて明るく答えた。

「……………そうですね」

またしても低く唸るようにそう言つと、静奈の顔がゆっくりと持ち上がり、その表情が露わになる。

優はその顔を見て、背中に悪寒が走るのを感じた。静奈の白い顔は、どこか無機質で、感情というものが読み取れない。

静奈の瞳が異様なほどに狂気の色を醸し出し、無機質なその表情はどこか能面のような畏怖を感じさせる。

本人には自覚はないだろうが、静奈は美人である。それこそ日本人形のような美しさがある。

その彼女がこういう表情をすれば、それは十分な迫力と、言い知れぬ恐怖があった。

優は静奈の発する狂気の視線から、抗うことが出来なかった。

静奈の白い顔にくつきりと浮かび上がる程に印象的な紅い唇が、ゆっくりと開き、物語を紡ぎ始める。

その声は、暗く沈んだこの教室に、ひとつの旋律として流れ出していった。

「これは私のお兄ちゃんが学生だった頃の話なんだけど」

プロローグ（後書き）

ゆっくりと連載していきたいと思います。

メール 第壹話（前書き）

月島静奈が語る物語です。

メール 第壹話

ななつ……

メール

第一話

作：ことぶきはじめ

「うちの学校から送られてきたメール。これ絶対に開いたら駄目なんだって」

「えー、なんでえ？」

「死んだ生徒からのメッセージなんだって」

「バツからしいい」

「その生徒が死んだ時間が19：25で、その時間のメールだけは絶対に見たら駄目なの」

「何で死んだ時間が分かるの？」

「そりゃあ、警察が調べるから分かるでしょ」

「アホくさ……」

「……だよねえ」

その日も両親は遅かった。

かんだみのる

神田実かんだみのるは自分の部屋の時計を見る。棚の上に置かれたデジタル時計の数字は23:52だった。

すでに日付も変わろうという時刻なのに、両親はまだ帰ってきていない。

それは今に始まった事ではないし、両親からの束縛を何よりも嫌う年頃の少年にとって、より快適な環境であった。

実はそのささやかな時間を、存分に楽しんでいる。多少の寂しさを紛らわせながら。

学校から帰ってきてても、家の中から木霊す声は全くなく、自分の声の不気味に響き渡る。生活音は全くない。家の中に人もいない。

誰かに構って欲しいと思うこともあるが、それは当然のこととなりつつあった。

そのような理由で実は無言で黙々と、自分で自分の世話をすることがなかった。洗濯、掃除、食事の準備。学校の勉強以外でも、実はやることが沢山ある。

当初はそれらが多少煩わしくもあったが、今では日常の一部となってしまうている。

いくら慣れたとはいえ、それらの雑務から解放されれば、夜の帳の落ちた時間になるのも仕方のないことであった。

そしてその僅かな自分の時間を、実はパソコンの中で楽しむことにしていた。

パソコン本体の電源を入れ、画面が立ち上がってくるのを待つ。
このパソコンは一年ほど前、たまに早く帰ってきた両親が、実の
暇つぶしにと買い与えたものだった。

ノート型のパソコンで、買った当時の値段は10万ぐらいだった
ような気がする。

かまうてやれない両親の贖罪なのだろうか。どうでもいいことに
金をつぎ込むとは思いつつも、拒否するなどという愚かなことはし
なかった。

画面が立ち上がると、とりあえずネットに繋ぎ、まずは自分宛の
メールをチェックする。

サイト運営などをしているわけではないので、メールチェックな
どは時々しかしないが、それでも何か変わったものが送られてくる
可能性はある。

そして本日送られてきたメールが6通ほどあったが、ほとんどが
広告などのメールであった。

最後のメールを削除しようとして、マウスを動かす指がピタリと
止まる。差出人を見れば学校からである。件名には何も書かれてい
なかった。

怪訝に感じながらも一瞬、そのメールを読まずにそのまま削除し
てしまおうかと思う。けれどすぐに思いとどまり、内容を確認した。

わたしを探してください。

とだけ書かれたいた。

実は日付を確認する。日付は本日であった。次いで時間を確認す
る。時間は19:25。

不気味さが一瞬、実の全身を駆け抜けていったが、それはすぐに
不快感へと変わっていった。

「クラスの奴の悪戯か？」

不快感からか、ついついそんな独り言が口から零れる。

暇なことをする奴もいたものだ。こんな悪戯をしそうなのは……、
いくつかクラスメートの顔が実の頭を過っていった。

椅子の背凭れに体重をあずけ、上半身を後方へと逸らしていく。

なんとなくサイトを一覽する気分ではなくなった。

「……寝るか」

結局はクラスの誰かの悪戯だろう。なんとなく気が削がれたような気がして腹立たしい。明日学校に行った時にでも問い質せばいい。

上体を逸らし、椅子に座ったまま両手を天井に向かって突き上げ大きく伸びをして、自分の中に発生した靄を外へと追いやる。

それからフラフラと立ち上がり、部屋の電気を消す。ベッドへと潜り込んでふわあと大きく欠伸をすると、そのまま夢の世界へと旅立っていった。

翌朝。いつ帰ってきたのか、そしていつ出かけたのか分からないが、とにかく両親はすでに家にはいなかった。

それを寂しいと思うことはなくなったが、やはり少しぐらい顔を合わせてもいいような気がする。

簡単な朝食を口に放り込み、朝のテレビを眺めながら咀嚼する。それから身だしなみを整え、家を出た。

通学路には燦々と朝の太陽が降り注いでいる。その陽の光を浴びながら、実は学校へと続く道を歩いていく。次第に生徒の姿も多くなっていく。

賑やかになる通学路を傍目に見ながら、昨夜のメールのことを考える。

あれは一体、クラスの誰の仕業だろうか？ と……。

「よお！」

いきなり声を掛けられた。相手の右腕が実の首を軽く締め上げる。軽く咳き込みながら、そんな事をするいつもの相手を見返した。

「おはよう、誠」

田所誠は、クルリと相手の正面へ回ると、おどけた風に敬礼した。

「おはよっす！」

手ぶらのまま、誠はフラフラと実の横を歩きだした。実はそんな誠を横目に見つつ、昨日のことを尋ねる。

「昨日のメール。お前だろ？」

「はあ、メール？ なんのこっちゃ？」

惚けているのだろうか？

一瞬そんな疑念が実の頭を過るが、誠は嘘を突き通せるほどポーカーフェイスが巧いわけではない。

こいつじゃないのか。そういつた悪戯をやりそうな人物であったが、その彼が違うというのなら違うのだろう。

長年の付き合いからそれぐらいのことは分かる。では他の奴らか？ 漠然とそんな事を考えながら、先を歩く誠の背中を眺める。

長細い誠の顔が、僅かに後ろを振り向いた。

「早く行こうぜ」

フラフラと先に行く誠に声を掛けられ、実はゆっくりと歩きだした。

学校に着き教室へ入る。自分の席に着き、うつ伏せになった。

昨日のメールの些細な疑惑が小さな棘となり、実の心の中に深く突き刺さる。

それが気になり、他者の雑音を遮断して、うつ伏せのまま自分の考えを纏めようとする。

送られてきたアドレスはこの学校からだった。時間は19:25。誰かが学校に侵入し、悪戯したのではないだろうか。

だとしたら何の目的で？ しかも『見つけてください』ってどういうことだ？

「……そりゃ実。幽霊からのメールだよ」

突然声を掛けられたことにビククリして見上げると、そこには誠が居た。相変わらずヘラヘラとにやついている。今はそれがどうも癢に障る。

やっぱりこいつが犯人か？

「へへへ、怖い顔すんなって。それに今、声に出てたぜ」

知らず知らずのうちに声が出たのか。恥ずかしさを隠すため、誤魔化すようにして頭を掻いた。誠に対しては曖昧な表情をみせる。誠は相変わらず、ヘラヘラと笑っている。どうもこの締りのない顔が昔から好きではないが、それでも一緒にいるのはなぜだろうか。

「まっ、そのメールだけどき、何かの間違いつてこともあるさ。気にすんなって」

誠の言うとおり、やはり考え過ぎだろうか。何となく心に引っ掛かるものを感じつつ、実はメールの件を忘れることにした。

結局、誰かに問い質すこともせず、その日の授業は過ぎていった。

朝からの快晴は夕方過ぎには崩れ始め、実が家に着くころには大粒の雨が降り始めていた。

家に入ると鞆を放り投げ、急いで洗濯物を取り込み、乾燥機にかける。その間に濡れて冷えた体を温めるため、シャワーを浴びた。シャワーから流れ出る温水に身を委ねつつ、ふと頭の隅に残っていたメールの件を思い出す。

学校では朝以来思い出すことはなかったが、家に帰って人心地着けば、妙にそのことが気になった。

「気にするな」と誠は言っていたが、シャワーを浴びて心に余裕ができたことにより、メールのことが蒸し返される。

あの文面には一体、どういった意味があるのだろうか。『私を見つけてください』と書かれていたが、その“私”とはいったい誰のことなのだろうか。

シャワー口から降り注ぐ水滴が床のタイルに叩きつけられ、風呂場に響き渡る。

物思いに耽りながらも全身を洗い終え蛇口を止め、風呂場から出た。足マットで水気を切り、近くに置いてあるタオルで身体に着いた水滴を拭いとっていった。

手にしたタオルを頭から被る。その奥から「ふう」とため息が漏れ聞こえてきた。

いつもより早い時間に自分のパソコンの前にいるのは稀であるが、それは日常の家事の手を抜いたからという理由がある。

手を抜いたのは、やはりあのメールが気になったからである。今日もパソコンを立ち上げ、メールをチェックした。

一件のメールが受信ボックスに入っている。宛名はやはり実の通う学校からであった。

やはりという思いと不気味さを内包しつつ、実は僅かに震える指でマウスをクリックした。

ディスプレイに、届いたメールの内容が表示される。

私を探してください。私は学校にいます。

短い文章ではあるが、昨日よりは幾分内容が踏み込んだものになっている。

ゴクリ

実は生唾を飲み込む。カラカラと干乾びていく喉がやけに熱く感じられる。

実はこの不気味なメールの内容に、少し興味を持ち始めていた。この文章に対し、返信すればどうなるのだろうか？

好奇心が実を支配していく。カーソルがグルグルと画面を所狭しとまわり始めた。

実の口から、絞り出すような、どこか呟いたような声が漏れる。

「返信……、してみようかな……」

これは冗談だ。何かの冗談に決まっている。絶対に何も起こらない。

大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫……。

心の中でそう念じながら、恐々と文章を打ち始める。

もしかしたら……、いやそんなことは、でも……。

あなたは誰ですか？

実はたったそれだけを書くのに、たつぷりと5分以上をかけた。戸惑いと決意が心の中でシーソーのように揺れ動く。キーボードを叩く指が僅かに震え、目的の文字を正確に打ち抜くことも出来ない。

やっと文章を打ったとしても、それを送信するためにEnterキーを押すのが躊躇われる。

それらは全て、この後に起こる事象が予想できないからである。

これらが全てただの悪戯ならまだいい。

けれどそうでなかったら？

何かの悪意が込められていたとしたら？

恐怖は人間を魅了する。魅了されれば、その先にある真実を知ろうと思う。

その真実を知るためには対価が求められる。その対価は自分に払いきれるものだろうか？

「いや。やっぱりただの悪戯さ……」

自分に言い聞かせるその言葉は、どこか弱々しい。緊張からか僅かに息も荒い。

実はEnterキーを、己の臆病さを振り切るように叩き押した。何事もなくメールは送信される。

クルリと周囲を見渡す。なんの変化もない。

当然だ。メールを送っただけで変化などあるわけがない。何かがあるとしても、そんなのは映画の中だけの話に決まっている。

自然と笑いがこみあげてきた。ゲラゲラと笑う声が部屋中に響く。

たったこれだけの文章を書くのに、えらく気疲れしたような気がする。

何事もないと分かると、自分のバカさ加減に呆れ返ってしまう。メールを送信するとき真剣に悩んでいたが、なぜそれほどまでに悩む必要があったのか。

その緊張が途切れたのか、それとも何かが起こるといふ期待に対し、あまりにもあっけなくメールが送信されたことに対する反動からか、実の笑はしばらく途絶えることはなかった。

ようやく自己の笑いの奔流から解放された実は、椅子の背凭れに体重をあずけて、大きく伸びをした。

ソワリ

その時、実の背後を何かが通る……、いや、通ったような気がした。

項の辺りを何かがぬるりと触る。

背中に悪寒が走った。

素早く後ろを振り向くが、そこにはいつもの部屋の扉があるだけで何かが存在するわけではなかった。

いつも見慣れた自分の部屋が、どこか見知らぬ部屋のように感じられた。

メール 第5話（後書き）

なんか色々と使い方がまだわかっていない……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2179z/>

ななつ.....

2011年12月11日15時54分発行